

オール関西大学が燃えた日々

—関西大学第一高等学校野球部 栄光の軌跡—

熊 博 毅

「春はセンバツから」のキャッチフレーズどおり、平成十年、関西大学の春はセンバツとともに訪れた。関西大学第一高等学校野球部が、前身の関西甲種商業学校時代から数えて六十九年ぶりに念願の「甲子園切符」(二度目)を手にしたからである。

三月二十五日の開幕式から四月八日の決勝戦に至るまでの二週間は、選手だけでなく、関大一高生徒や学生、校友、大学関係者までもが一体となって燃え、オール関西大学のパワーを全国に強くアピールした。同時にまた、この二週間は、二十五万校友が球春の「夢」に酔い、

「夢」が「現実」になつていくさまを目あたりにしながら、母校との「絆」を確かめ合つた感動の日々でもありました。

緊張の面持ちで抽選会

この年のセンバツは七十回の記念大会となるため、例年より四校多い史上最多の三十六校が選ばれた。このうち、三十年以上のブランクを経て出場した学校は、関大一高を含めて五校にのぼつた。地元の近畿では、関大一高と関西学院高等部の古豪復活が注目をあび、関・関対決の実現にも期待がふくらんだ。



準優勝旗を先頭に行進する関大一高ナイン

三月十四日、毎日新聞大阪本社のオーバルホールで開かれた抽選会には、出場三十六校の選手ならびに学校関係者が緊張の面持ちで集まつた。

この日、関大一高野球部・横山央宣主将が引いたくじで、初戦の対戦相手は、春夏通じて甲子園初出場となる三重県代表の鈴鹿高校と決まつた。鈴鹿高は俊足の一、二番がチャンスを作つて得点につなげていく打線の集中力が持ち味のチームで、尾崎光宏関大一高監督も「足の速い選手がそろつているのが脅威」と相手校の印象を語つた。同時に「(関大一高は) 打力が弱いので三点をめぐる攻防、投手戦になりそう」と予想し、「早いイニングに先取点をあげて主導権を握りたい。西本(雅成)捕手がキーマンで、安打が出ればリードもよくなるだろう。久保(康友)投手の力を百二十パーセント引き出してほしい」と主砲・西本捕手の活躍に期待を寄せた。

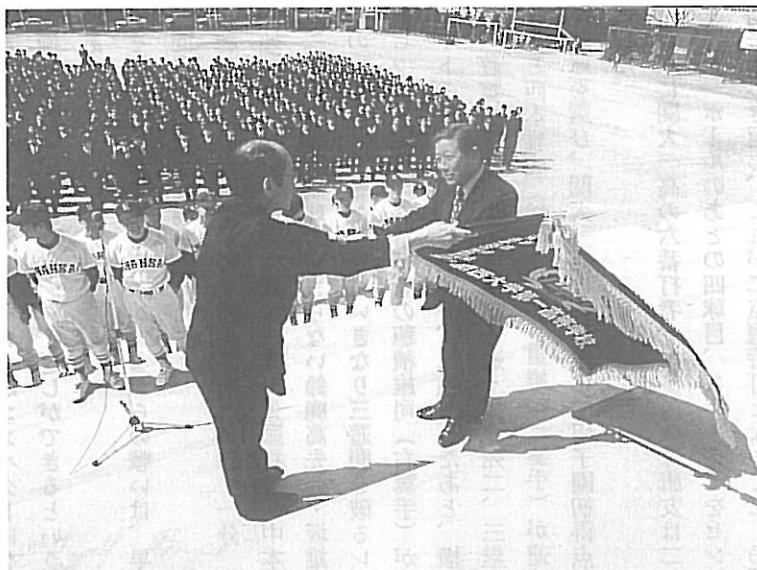
【鈴鹿高校戦（二回戦・三月三十日）】

序盤に山場

大会第五日の三月三十日、関大一高は甲子園初勝利をめざす鈴鹿高と対戦した。抽選の結果、両校とも一回戦が不戦勝となつたため、二回戦のこの試合が初陣。

試合開始前、尾崎監督はナインを前にして三つの指示を出した。一つはピッチャーの久保に対し「省エネ投法の勧め」、もう一つは野手に対して「声を出せ」、残る一つはバッティングの際、「ショート、セカンドの頭をねらつていけ」だった。

「省エネ投法」のねらいは、ピッチングの球数を少なくすることで、体力を無駄に消耗しないですむ。また、野手同士が声をかけあえば、守備の連携、意思の疎通がはかれ、目に見えない包囲網を敷くことができるというメリットが生じる。大舞台で地に足がつくという副次的な効果もねらつっていた。さらにショート、セカンドの頭



毎日新聞社会部長からセンバツ旗を受け取る長尾宏校長

をねらつて打てば自然、スイングがコンパクトになり、大振りを防いで素直なセンター返しができるという利点があった。

そして相手の出方をうかがいながらの戦いは、早くも一回表に大きな山場を迎えた。

穂やかな春の陽光が降り注ぐ午前九時三十一分、試合開始のサイレンと同時に関大一高の先頭打者・中本真教（二塁手）が、制球の定まらない鈴鹿先発・坂雄一投手の立ちあがりをたたき、いきなり三遊間を破るレフト

前ヒットで出塁。二番打者の穂積雄司（右翼手）がストレートの四球を選んで無死一、二塁としたあと、横山央宣（遊撃手）がバントで手堅く送つて一死二、三塁。そのあと西本雅成（捕手）、大谷重雄（一塁手）が連続して四球を選び、関大一高は押し出しで甲子園初得点を手にした。

（前略）関大一の鍛えられた強さは初回の攻撃に凝縮されていた。

く西村幸平（三塁手）も四球を選んで再び一死満塁としたあと、紺谷保孝（左翼手）が一ストライク二ボールに続く四球目を一塁線に転がしてスクイズ成功。この回、打者一巡で一挙に四点を先取した。金属バットで飛距離が出る高校野球では、セーフティーリードを保つために最低四点は必要というのが尾崎監督の考え方で、バントのうまい紺谷がスクイズを決めれば本人の自信にもつながるし、チームも安全圏にたどりつける、というのがスクイズを選択した理由だった。

この日の『サンケイ新聞』夕刊は「機を見て戦術、変幻自在」と題し、一回表の攻撃に対する戦評を次のようにしている。

さらに関大一高の六番打者、エース久保康友は二ストライク一ボールのあと四球目、スライダーをセンター前にはじき返し、これが二点適時打となつて三一〇。続

安打の中本、四球の穂積を横山が送つて一死二、三塁の好機。制球の定まらない鈴鹿先発の坂を見て、尾崎監督が打者に出したサインは「待て」。四番西



打線爆発で次つぎと生還するランナー

本、五番大谷は連続四球を選び、押し出しの先制点。大谷は「指示が出ていたので落ち着いて見逃せた」。

まだ一死満塁の好機は続く。指示が変わった。

「外の球が多い。大振りせずに打て」。久保は外角球をおつづけて右前安打するお手本のような打撃。

二点適時打となり、この回三点目。さらに西村も四球で再び一死満塁。紺谷のカウント一一になつたところでまたまた指示が変わった。「スクイズだ」。

なぜ戦術を変えたか。尾崎監督は「四点取れば満塁打（ホームラン）でも同点。それに紺谷の球を見逃すタイミングが悪かった」と言う。「投手の球を三球見ていたし、急にサインが変わつてもプレッシャーはなかつた」という紺谷は一塁線に絶妙のスクイズを決め、四点目を挙げた。

尾崎監督が使い分けた三つの得点パターン。機を見る的確な指示とそれにこたえる選手の技量。練習の成果が見事に出た攻撃について、尾崎監督は「一〇〇点満点」と破顔一笑。(後略)

二点追加して先発・坂投手をKO

制球難に苦しむ相手先発投手・坂に比べて関大一高の主戦投手・久保は安定していた。冷静で平常心そのままの投球は「良い意味で予想外だった」と尾崎監督も驚くほどだった。先頭打者の平山哲也（中堅手）には内野安打を許したものの、続く岩崎優（左翼手）、濱田慎也（遊撃手）、間柄英幸（捕手）のクリーンアップ三人を難なく押えて初回を乗り切った。

二回表、関大一高の攻撃はなおも続いた。

初回に三遊間をやぶるヒットを打つて先制点のきつかけを作った中本が、この回もレフトフェンス直撃の三塁打を放つて攻撃の火ぶたを切った。続く穂積、横山、西本の三人がゴロと2四球で一死満塁としたあと、五番の大谷がカウント一一三のあとの五球目をセンター前にはじき返して二点追加、六一〇と大きく点差を広げた。

さらに一死一、二塁でチャンスは続く。六番打者、久保の一球目、坂の投げたボールを捕手の間柄が後逸して一死二、三塁。そして連続三ボールで久保はストレート

の四球となり、一死満塁となつたところで坂はついに降板。代わって登板した二年生投手の元原佳紀が後続の西村、紺谷をいずれも一塁ゴロに打ち取つて、鈴鹿高はようやくピンチを脱した。

好機逃がさず、鈴鹿に圧勝

鈴鹿高が反撃を見せたのは三回裏の攻撃だつた。先頭の神戸藤吉（三塁手）が四球で出塁したあと、岩崎が左中間を破る流し打ちで三塁打とし、一塁ランナーが生還して一点を返上した。ただ、後続がままならず、岩崎は三塁に残塁したまま、この回の攻撃は終了した。

関大一高は相手内野陣の守備の乱れと、主砲・西本のセンター前タイムリーヒットで三回表に二点追加して八一〇としていたが、五回表にも、ライトの頭上を越える横山の三塁打と西本のライト前ヒットで二点を加え、この第七十回記念大会では初めての二けた得点を記録した。さらに六回表にも紺谷、三浦達也（中堅手）、穂積の三安打を集めて二点を追加、「三點をめぐる攻防になりそう」（尾崎監督）という対戦前の予想を大きく覆し、結



歓声にわくアルプススタンド

果は十五安打十四得点と、一方的な展開の圧勝となつた。試合後、尾崎監督は報道陣のインタビューに答えて「大振りせず、ストライクに的を絞り、野手の頭をねらつていけ、と指示を出していた。大きく振り回さなかつたのが、これだけのヒットにつながつた原因。打撃について百点満点」とチームの打線爆発に目を細めた。

関大一高の六十九年ぶりの白星というのは、市岡高校（大阪）の六十一年ぶり、鳥取西高校（鳥取）の六十年ぶりをしのぐセンバツ新記録であつた。大観衆で埋まつた一塁側アルプス席では、大量得点による幸先良いスタートに感慨深く握手を交わす年配OBの姿も数多く見かけられた。

関大一高	4	2	2
鈴鹿	0	0	1
	0	0	0
	0	0	0
	1	14	

【今治西高校戦（三回戦・四月四日）】

痛恨の悪送球で一点献上

久保康友、今治西・福井芳郎、両右腕エースの出来、立ち上がりに注目」という試合前の予想どおり、今治西高との戦いは一点を争う好ゲームとなつた。

鈴鹿から十五安打十四得点を挙げ、爆勝発進した関大一高だったが、対する今治西高校も初戦の東築高校戦で十六安打十四点をたたき出し、大会新記録となる八本の二塁打を放つと同時に、一イニング最多二塁打四本という大会タイ記録も作る強力打線のチームで、公式戦での打率が三割九分七厘と、出場三十六校中二番目の打撃力を誇っていた。初戦で四打数四安打を放つた阿部敏光（一塁手）を筆頭として、打線に切れ目はなかつた。

一回裏、関大一高の攻撃では、四番打者・西本の打席に注目が集まつた。西本は、初戦の鈴鹿高戦で四球、四球、中前、右前、三塁強襲、右前と六打席連続出塁を記録し、四打席連続安打、打点三を挙げ、昭和五十五年に愛知・亨栄高校の藤王康晴選手が出した連続十一出塁、八打席連続安打の記録を更新するかもしれない期待がかかっていたからである。しかし、二死二塁で迎えた初打席で西本は、一ストライクのあと二球目をショートゴロとし、残念ながら連続記録を伸ばすことはできなか

どうという読みも尾崎監督にはあつた。
「好発進したチームの勢いはどちらが上か。関大一・

つた。

先制点を許したものの、エースの久保は二回以降、気持ちを切り替え、打たせて取る頭脳的なピッチングを展開した。この日の久保は直球、変化球ともに切れがあり、制球も安定していて、一四〇キロの速球とスライダーを巧みに織り交ぜながら、この大会屈指の強力打線を封じ込めた。

三回裏、今度は逆に関大一高が二アウトとなつてから中本・四球、穂積・左前打、横山・四球とつないで二死満塁のチャンスを迎えた。ここで四番・西本が四球を選び、押し出しで同点に追いつくと、スタンド全体に響きわたる大歓声がわき起こつた。

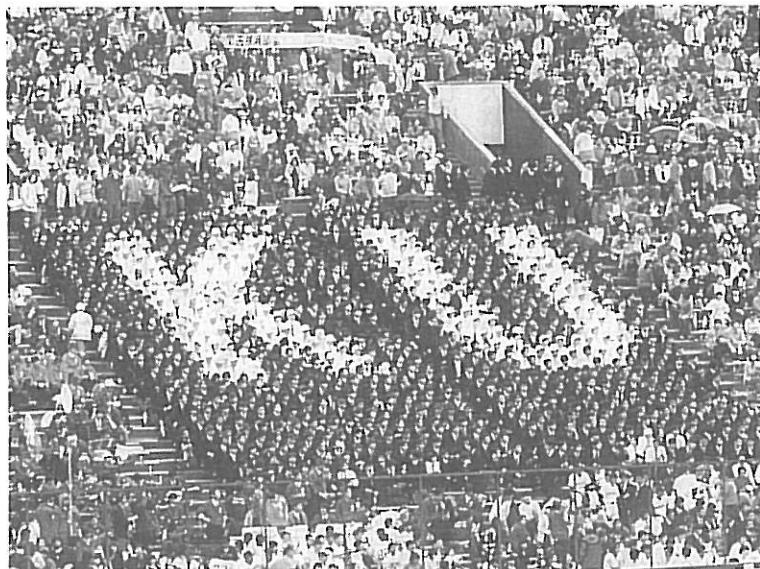
その後、久保のリズムある投球に、今治西高打線は三者凡退を繰り返した。初戦よりはるかに良くなつている久保に対して、テレビ中継のアナウンサーも「背番号1番が頼もしく見えます」とコメントするほどであった。
逆転で今治西高を下し、8強進出

試合の流れが完全に関大一高へと傾いた五回裏、早い

テンポで進んでいたゲームに動きが現れた。当たつてい

る二番の穂積が、この日三本目のヒット（右前）で出塁。横山が一塁ゴロで穂積を進め、二死二塁の好機をつかむと、四番の西本がカウント一一〇に続く二球目、やや甘いスライダーをセンター前へきれいにはじき返して期待に応えた。西本の打球がショートの頭上を越えると同時に、二塁ランナーの穂積は俊足を利かして懸命にホームヘッドスライディング。センターからの返球はクロスプレーとなり、微妙なタイミングに大応援団はかたずをのんで判定を待つた。一呼吸おいて審判が横に大きく手を広げた瞬間、アルプススタンドで円陣を作つて応援していた野球部員たちは喜びを爆発させ、総立ちのスタンドも拍手と歓声に包まれた。

その後、六回には、初回のエラーを挽回する横山のスープーキャッチ、九回には三塁手の落球をカバーする久保の好プレーも見られた。アルプス席だけでなく、内野席まで一万人を超える観客で埋まつた一塁側応援席は、初戦と違う緊迫したゲーム展開に一喜一憂した。試合前、



アルプススタンドに浮かびあがった「KU」の人文字

ナインと「キャッチ・ザ・ドリーム」と合言葉のように言い合っていたムードメーカーの穂積が自らの好走でつかんだ決勝点を、エース久保の力投で守りきるという、伝統の「守りの野球」で関大一高はベスト8へと駒を進めた。

「とにかく、制球に気をつけた。それさえ注意すれば、打たれるはずはないと思った」

試合後、自分の投球をふりかえつてピッチャーの久保はこう語っている。試合時間は、この記念大会で最も短かい一〇二分間。投球数百一球、被安打三、八奪三振、外野まで届いた打球はわずかに三本という安定した投球内容に、捕手の西本も「直球がすごく良かった。少々甘くても大丈夫だつたから、どんどん要求できた」と僚友の力投を賞賛、また、尾崎監督も「二戦目なので落ち着いていた。手の振りがよく、スピードも出ており、コントロールが良いので安心して見てもらえた。何もかもがうまくいった」と満足そうだった。

その西本も、五回裏を見せたセンター返しは、四番打

者の面目躍如といえる一打だつた。普段からイメージしている理想的なバッティングフォームが、ここ一番の場面でしっかりと実を結んだ。

守備陣を支えたエースのひとつこと

紳だけで勝てるほど甲子園は甘くない。しかし、「あいつのために」という動機づけが、ときとして思いもかけないドラマを生むことがある。そのひとつが、主将・横山の見せたスーパー・キャッチだつた。

六回表、今治西高・阿部が打つた球は強風に乗つてフアーレボールとなり、三塁側アルプススタンド直前にまで伸びていった。三星の西村、レフトの紺谷が追いかけ、二人とも、もう捕れないとあきらめたその瞬間、ショートの横山があいだに入り、大きく横つ飛びして捕球した。着地の瞬間、横山は腰を強打したが、最後までボールは放さなかつた。

この懸命のダイビングキャッチについて、その理由を横山は試合後、「（久保に）申し訳ないと思ったから」と語っている。また「なんとか意地を見せたかった」とも。

この日、横山は初回一死二塁の場面でショートゴロを三塁へ悪送球し、今治西高に先制点を許す痛恨のミスをおかした。ベンチに帰つて「すまん。今日はノーエラーでいこうと言つていたのに……」と謝る横山にエースの久保はこう声をかけている。「気にするな、まかせておけ」。この久保のことばを聞いて、横山は心に決めた。「次に飛んできたら、おれはおまえのために絶対捕つてやる」。

横山にとって、六回のこのキャッチは、先制点を献上した汚名を挽回するとともに、主将としての気概を見せるファインプレーでもあつた。このあと横山は、最小リードで迎えた九回表にも先頭打者の阿部が放つた深めの難しいショートゴロを一塁へ好送球し、俊足の阿部を間一髪で刺してチームを大いに盛り上げている。

もうひとつ、エース久保の、スコアブックには記録されない「牽引車」としての力量を示すエピソードがある。これもまた九回表の守備でのできごとだ。

一アウトランナー一塁。試合は終盤に大きな山場を迎



力投する久保康友投手

えていた。このとき、今治西高・高木慎一（右翼手）は久保の投げた球を三塁線に高だかと打ち上げてしまう。三塁手の西村は、自分の方に飛んできた球を受けようと捕球動作に入ったが、一瞬、打球が薄い雲のかかつた空に溶け込んでしまった。再び視界に入つたとき、白球は上空の強風で思つた以上に自分の方へと流されていた。

落球ー。近くにいた久保がすばやく球を処理して二塁へ投げ、一塁走者を封殺したが、西村の動搖は大きかつた。

西村のまわりにはすぐにチームメイトが集まつたが、そのとき、久保が西村の肩をたたき、微笑みながら、からかうようにこう言つた。

「おまえ、ガチガチやつたぞ」

二アウトにはなつたものの、依然として一塁に走者を背負う状況。しかし、このひとことで内野のメンバー全員が再び落ち着きを取りもどした。マウンドにもどつた久保は、一球ボールを投げたあと、絶妙のコントロールで後続の柿見信太郎（一塁手）にセカンドゴロを打たせ

た。二塁の中本が腰を落としてがつちり捕球、一塁の大谷に危なげなく送球して、この瞬間、ベスト8進出をかけた試合の幕は下りた。お互いがお互いを思いやる気持ちで手に入れた勝利は、チーム全体にとっても貴重な経験となつた。

今治西高	1	0	0	0	0	0	0	1
関大一高	0	0	1	0	1	0	0	×

【浦和学院戦（準々決勝・四月五日）】

ピンチにも動じず、"越せた"逆転劇

センバツ第十日の四月五日は準々決勝の四試合が行われた。いずれの試合も熱戦で、第一試合と第三試合が延長のうえでのさよならゲームとなつたため、第四試合の関大一高対浦和学院戦は、開始予定時刻から一時間四十分遅れ、カクテル光線に照らされてのナイターとなつた。

試合前、尾崎監督は選手たちに「三十六校の代表に選ばれたうえ、ベスト8にまで来ることができた幸せをみんなで感じよう。夏にまたもどつて来られるという保証はないし、今日は一生の思い出になるようなゲームにしよう」と声をかけた。時代が違うとはいえ、六十九年前、前身の関西甲種商業学校と同じベスト8に並んだという安堵感もあつた。

その青春の思い出になる対戦は、二試合連続して相手チームに先制点を許す運びとなつた。二回裏、先頭打者の南良輔（三塁手）が、久保のこの大会二個目となる四球で出塁し、原田涼（左翼手）が送りバントで一死二塁としたあと、続く真下篤（一塁手）がセンター前のヒットを放つた。返球は二塁ランナーの南と本塁上クロスプレーとなつたが、キャッチャーの西本が後逸して先制の一点を与えてしまつた。先手を取られたあとも一死二塁でピンチは続いたが、二塁の中本が難しいゴロをファインプレーで処理するなど、なんとか最小失点でこの回を抑えた。

取られたら取り返す。関大一高の反撃は早くも三回の表に始まつた。二アウトのあと、三浦が四球を選んで出

塁。続く中本がセンター前ヒットで二死一、二塁となると、前日のヒーロー、穂積が初球をレフト前ヒット（テキサスヒット）とし、それが三塁悪送球を誘つて二塁ランナーの三浦が一気に生還、同点に追いついた。

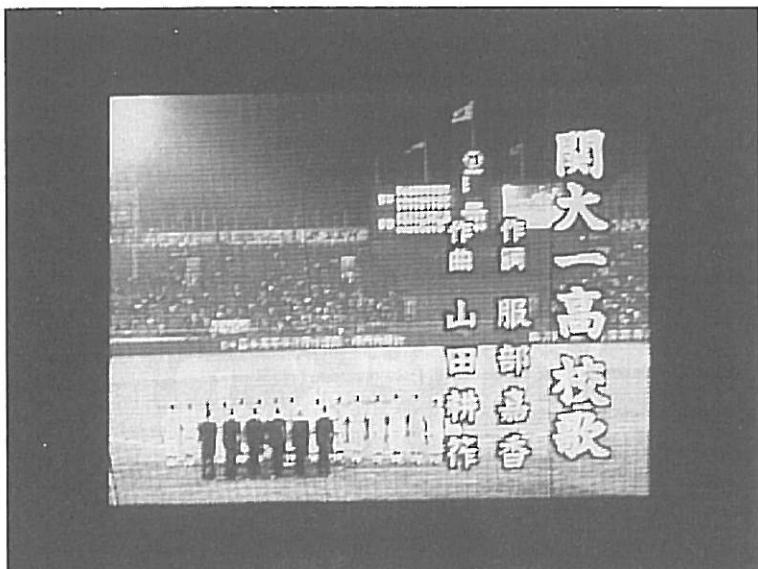
さらに四回、一死二塁の好機に久保が逆転のライト前タイムリーヒットを放ち、二塁ランナーの西本が生還して勝ち越し（二一）。なおも一死一塁で続くチャンスに、四番手の紺谷がカウント二一のあと四球目をショートヒットとし、エンドランを決めて一死一、二塁。

さらに西村もライト前ヒットで一死満塁とした。関大一高のたたみかける攻撃に、浦和学院の守備陣はたまらずタイムを要求。内外野とも九人全員がマウンドに集まってスクイズを警戒した。プレー再開後、打席に立つた三浦の打球は三塁ゴロとなり、三塁ランナーの久保は本塁でタッチアウトされたが、そのあとの中本が高めのスライダーをレフト前に運び、貴重な追加点をチームにもたら

らして三一一とした。

六回裏、浦和学院の反撃は二アウトから始まつた。二塁にランナーを置いて打席に入つた真下の打球はレフトの紺谷とショートの横山が譲り合つてセーフとなり、この間に二塁ランナーの南（良輔）が生還して得点差は一気に一点となつた。しかし、久保はスタンドからわき上がる「久保、久保……」という大声援を味方につけて後続をたち切り、この回を乗り切つた。八回裏に迎えた無死一、二塁のピンチでも、久保は後続の三者を一塁フライ、スイングアウトの三振、一塁ゴロでテンポよくしとめ、スタンドの応援に応えた。

一点リードで迎えた最終回。久保の投球は冴えわたり、浦和学院の一、二番打者を相次いで三振に切つて取つた。そして勝利まであとアウト一つというところまできたが、浦和学院も最後に意地を見せた。秋山和也（中堅手）の放つた打球は左中間の奥深くへ達する三塁打、一打出れば同点という緊迫した場面となつた。迎える打者は四番の主砲・小板佑樹（右翼手）。しかし、ここでも久保は



スコアボードに映し出された関大一高校歌

攻めの姿勢を崩さなかつた。直前の九回表に一死満塁の追加点機を自らのスクイズ失敗（併殺）でつぶしていただけに、その投球には気迫がこもつていた。一球ストライクを取つたあと、力をこめて投げた直球はレフトに高だかと舞い上がり、落下地点で待つ左翼手・紺谷のグラブに収まつた。午後七時二十九分、初めて経験した甲子園のナイターは、こうして終わりを告げた。勝利の瞬間、応援席では夜空にメガホンが舞い、生徒たちは抱き合つて喜んだ。

関大一高	0	0	1	2	0	0	0
浦和学院	0	1	0	0	1	0	0
						2	

人文字揺れ、OBら歓喜

照明灯に浮かび上がつた一塁側アルブーススタンドは、最初から最後まで揺れ続けた。

関大一高の応援席が日ごとにヒートアップし、準々決勝のこのあたりから、すでに対戦相手のチームにとつて、



「パンザイ」を連呼して盛りあがる応援席

かなりの脅威になっていたのは確かな事実であった。

この日、アルプススタンドで声援を送っていた人たちの談話が新聞各紙に掲載されている。そのうちのいくつかを拾つてみよう。

「応援と選手の気持ちが一体化しているのがよくわかる」（関大一高アメリカンフットボール部生田祐也副主将）

「ここまで勝ち上るとは思わなかつたので、涙が出そうになつた。しかし、選手は試合で、僕たちは応援でがんばろう」（大会直前の故障でベンチ入りの選手登録から外れた村井政彦選手）

「高校野球は負けたら最後という緊張感がいい。今日はリーダーになるつもりで来たんですが……」（感激しながら私服のまま声援をおくる鈴木由希子関西大学応援団チアリーダー）

「私の人生の後半に大きな刺激と興奮を与えてくれた後輩に感謝したい。それにしても、この大はしやぎのアルプスは気持ちがいい」（古川智関大一高同窓会顧問、

六十五歳)

「関大一高OBでよかつたと改めて思える甲子園出場！毎日感動を味わわせてくれる球児たちにエールを思いつきりおくっています。仕事も手につかないくらい毎回感動しています」（谷本忍関大一高OB、四十一歳）

これに対しても、尾崎監督をはじめ、主将の横山ほか、ナインも次のように語っている。

「怒涛のように押し寄せる本当にものすごい応援。選手たちの力を大きく引き出してくれました」（尾崎監督）

「応援されればされるほど燃える。負ける気がしませんでした」（横山）

「大声援で、すごく気持ちが乗ってきました」（久保）
「あの応援、ほんま最高でした。技術のない僕に力を与えてくれるみたい」（穂積）

その一方で、キヤッチャー西本のこのようなことばも残つてゐる。

「これだけの観客を敵にまわしたらどうしようかと思つた」

当事者にとつては、これもまた正直な気持ちであつただろう。逆にいえば、それほど熱意のこもつた声援であつたということだ。

「（関大一高の）すごい応援は聞かずにがんばります」（浦和学院・南真人投手）といったコメントが残つてゐるほど、関大一高応援席からの大声援は、対戦チームにとつて、いわば「十人目の強敵」に匹敵したともいえるのである。

【日大藤沢高校戦（準決勝・四月七日）】

連戦・連投に恵みの雨

大会第十一日の四月六日は、準決勝二試合（P.L学園対横浜高、日大藤沢高対関大一高）が予定されていたが、前夜から降り続いた雨のため、午前十時に中止が決まり、日程が一日ずつ順延された。それまで三試合を完投し、

四日、五日と二日連続で登板していたエースの久保はじめ、ナインにとつては、身体の疲れをいやす「恵みの雨」となった。

準決勝は、大黒柱が一人で投げぬく「関大一高、横浜高」タイプと、複数投手を起用して継投策をとる「日大藤沢高、P.L学園」タイプの対決に注目が集まつた。加えて、勝ち残つた四校がそれぞれ大阪府と神奈川県二校ずつということで、東西の二府県対決にも関心が高まり、さらに関大一高とP.L学園が勝ち進んだうえでの大阪決戦（史上初）にも大きく期待がふくらんだ。いやがうえにもボルテージは上がつていつた。

大願に王手、頂点へ駆ける

準決勝のこの試合、攻守ともに関大一高は勝負強かつた。一回表、中川英俊（二塁手）の四球と鈴木義明（三塁手）のレフト前ヒットで一死二、三塁とした日大藤沢高に、四番打者・菅原康（捕手）の犠牲打（ライトフライ）で関大一高は一点先制を許すが、その裏、すかさず反撃に転じた。

四球で出塁した中本を穂積の送りバントと横山のショートゴロで三塁に進め、四番打者の西本が相手ピッチャー吉田孝弘のワイルドピッチを誘い、まず同点。このあと西本と久保があいついで四球で出塁して二死一、二塁としたあと、打席に入った大谷がカウント二ストライク二ボールのあと七球目をきれいに振り抜き、ライトを破るヒットとした。打球は、ダイビングキャッチを試みた右翼手・田山知幸のグラブの先をかすめる二点適時三塁打となり、関大一高は一一三と一気に逆転した。

二回裏には、三浦のショートゴロがイレギュラー・バウンドしてセーフとなる敵失に、中本のライト前ヒットをからめ、穂積のショートゴロで一点追加。さらに五回の裏にも西本のライトフライを日大藤沢高の田山が落球して二塁打としたところを、久保がすかさずセンターの頭上を越える二塁打を放つて加点し、一一五と大きくりードした。

しかし、日大藤沢高の攻撃も執拗だつた。中盤から終盤にかけ、久保はほとんど毎回、走者を背負う苦しい投



熱い声援をおくる大応援団

球となつた。六回表、菅原のレフト前ヒットを足場に四球と送りバントで一死二、三塁とした日大藤沢高は、七番の荒木拓人（左翼手）が三球三振に倒れたものの、続く宮田和則（遊撃手）の詰まつた三塁ゴロが三塁手・西村の一塁悪送球となつたため、二点を挽回するラッキーな結果となつた。三一五とにじり寄り、なおもランナー一塁の場面で代打に立つた中倉の二球目を西本が後逸してランナーは二塁へ。試合の流れは大きく日大藤沢高側に傾きかけたが、久保はカウント二一二から渾身の力をこめて速球を投げ込んだ。内角へ食い込む球に中倉のバットは空を切り、関大一高はからくもピンチをのがれた。

七回表の守りも苦しかつた。中川のライト前ヒット、鈴木の三遊間を抜くレフト前ヒットでつないだ日大藤沢高に、久保はこの試合五個目となる四球を田山に与えて二死満塁。一打同点もしくは逆転となる大きな山場を迎えた。続く打者は準々決勝でサヨナラ本塁打を打つている一塁手の五十嵐徹也。久保は、ファウルのあととの二球目をデッドボールに近い球として一瞬、ひやりとしたが、

真ん中低めの直球で五十嵐をピッチャーゴロに仕留め、エースの貫禄を示した。

八回表。再度、ピンチが訪れた。一死後、宮田がレフト線を破る二塁打で出塁。続く館山昌平（投手）も久保の五球目をセンター前にはじき返す。二塁ランナーの宮田は一気に本塁をねらつたが、ショートの横山がセンターフィールドの返球を好中継、さらにキャッチャーの西本が身体をぶつけるようにして走者を封じた。試合後、「ホームでアウトにしたシーンはすばらしかったですね」という報道陣のインタビューに尾崎監督も「ナイスプレーです。ですから、思いきり惜めてやりました」と答えているが、「流れは変えさせない」、ナイン一人ひとりに、そんな思いがみなぎったプレーであった。三アウト後、好プレーを見せた捕手の西本と中堅手の三浦がベンチにもどつてがつちりと握手するシーンは、このうえもなく印象的だった。

最終回二死。久保が最後の打者を二二二と追い込むと、スタンドからは「がんばれ、関大」コールが津波のよう

に押し寄せた。揺れる三塁アルプスを真正面に見ながら、久保は満身の力をこめ、直球で真っ向勝負に出た。三塁ゴロでゲームセットとなつた瞬間、ようやく久保から笑顔がこぼれた。ベスト8だった第六回大会以来、六九年ぶり、関大一高はついに決勝戦までたどりついた。

日大藤沢	1	0	0	0	0	0	3
関大一高	3	1	0	0	1	0	5

逆転劇に秘められた物語

ところで、この試合には二つの隠された逸話があつた。一つは久保と大谷の打順に関するエピソード、もう一つは西本の腕の負傷にまつわる秘話である。

初戦の鈴鹿高から準々決勝の浦和学院まで、関大一高的打順は五番・大谷、六番・久保というのが定番のオーダーだった。ところが、この日大藤沢高戦では大谷と久保の順番を入れ替わった。メンバー表を提出する相良雅文部長がオーダーを書き違えたのが原因だった。

「監督、今日、ぼくは六番ですか」という大谷の質問から“事件”は始まった。「そんなことはない」「でも、スコアボードは六番になっていますよ」。確認のため相良部長が本部に出向くことになったが、しばらくしてもどつてきた相良部長の顔面は蒼白だった。「（部長）辞任ものです」と告げたときには、関大一高の勝利もここまでか……、と周囲で取材していた報道陣がざわついた。しかし、結果は、渦中の大谷がクリーンヒットを放つての逆転劇。一度は離れたかに見えた運を再び引き寄せての勝利となつたのである。

もう一つのアクシデントは試合前の雨天練習場で起きた。ウォーミングアップのため、それぞれの選手がバッティングをしていたところ、控え選手の後ろを通り過ぎようとした西本の左腕にバットが勢いよく当たつてしまつた。西本の腕はまたたく間に大きくふくれ上がり、一刻も早い治療が必要となつた。しかし、主砲の負傷であるだけに、このことが相手チームにもれることも心配であった。ところで、高校野球では、出場校の世話をす

るため高校野球連盟の役員がそれぞれの学校を担当するが、たまたまこのとき、関大一高を担当していたのが、関西大学野球部で尾崎監督の三年先輩だつた達摩省一氏であつた。達摩氏は西本を、相手チームはもちろんのこと、報道陣にも見つからないよう医務室に連れていき、手当てをうけさせた。幸い、西本は試合にも出場でき、八回表のあわや、という場面でキャッチャーの本領を発揮し、本塁を死守する好守備を見せた。

【横浜高校戦（決勝・四月八日）】

“東の横綱”に挑んだ“前頭十三枚目”

この年の大会は前年同様、天候が不順で、決勝戦は当初の予定より三日順延となり、四月八日に開催された。この日、関西大学では第一高等学校と第一中学校の入学式が挙行されたが、新入生や保護者は門出の日と優勝戦が重なつたことに、むしろ晴れやかな表情だった。
「相手の横浜は大横綱。うちは前頭の下の方。高校生

らしく思い切ってぶつかりたい」

報道陣の質問に対し、尾崎監督は優勝戦の抱負をこう語った。

試合は横浜高・松坂大輔、関大一高・久保康友の両本格派右腕による投手戦となつた。対戦の様子を振り返つてみよう。

横浜高は一回、先頭の加藤重之（中堅手）が三塁ゴロに倒れたのち、松本勉（二塁手）がライト前ヒット、柴武志（左翼手）がセンター前に安打を放ち一死一、二塁とした。しかし、四番の松坂がセンターフライ、五番・小山良男（捕手）がショートフライに倒れ、先制の機会を逸した。久保は球が高めに浮いたものの、外角の変化球に切れがあり、まずまずの立ち上がりであつた。

関大一高も、二回裏に大谷がチーム初安打となるライト前ヒットで出塁し、それを久保が送つて一死二塁としたが、続く紺谷が三塁ゴロ、西村がショートゴロに倒れ、折角の同点機を生かせなかつた。

三回表、横浜高は一死から松坂の二塁ヒットと小山の四球で一、二塁としたが、後続が内野飛球（ショートフライと一塁フライ）で凡退して追加点をあげることはできなかつた。

関大一高も三回裏、一死からレフト前ヒットで出塁し

まず、先頭の後藤武敏（一塁手）がレフト前ヒットで出塁し、これを小池正晃（右翼手）がバントで送り、斎藤清憲（三塁手）のレフト前ヒットで一死一、三塁とした。その後も加藤が送りバントを決めてランナー二、三塁となつたが、久保は松本にライト前フライを打たせて後続をたち切つた。

対する関大一高も、二回裏に大谷がチーム初安打となるライト前ヒットで出塁し、それを久保が送つて一死二塁としたが、続く紺谷が三塁ゴロ、西村がショートゴロに倒れ、折角の同点機を生かせなかつた。

三回表、横浜高は一死から松坂の二塁ヒットと小山の四球で一、二塁としたが、後続が内野飛球（ショートフライと一塁フライ）で凡退して追加点をあげることはできなかつた。



連戦ながら好投する久保投手

た中本が、二アウト後に盗塁で二塁を陥れて得点圏に進んだものの、続く横山の痛烈なピッチャーライナーを松坂が反応よくキャッチして無得点に終わった。「このシーズンは本当に残念だった。抜けていれば同点に追いつき、もしかすれば試合の流れまで変わったかもしれない」。尾崎監督も悔やむ痛恨の一打だつた。

四回表、横浜高は斎藤の三遊間を抜くレフト前ヒットや松本の四球などで二死一、三塁として追加点のチャンスを迎えたが、柴のライト前への打球を穂積が好捕球、得点に結びつけることはできなかつた。連投の疲れで直球の勢いが落ちている久保だが、要所では踏ん張りを見せた。

このあと、四回裏から六回表にかけての中盤の攻防は両チームとも譲らず、比較的短時間で攻守が入れ替わつた。関大一高の四回は、この試合初の三者凡退。五回表の横浜高の攻撃では逆に久保が意地を見せ、的を絞らせない西本の好リードとともに、打者三人を凡退に切つて取つた。五回裏、バットを普段より短く持つてシャープ

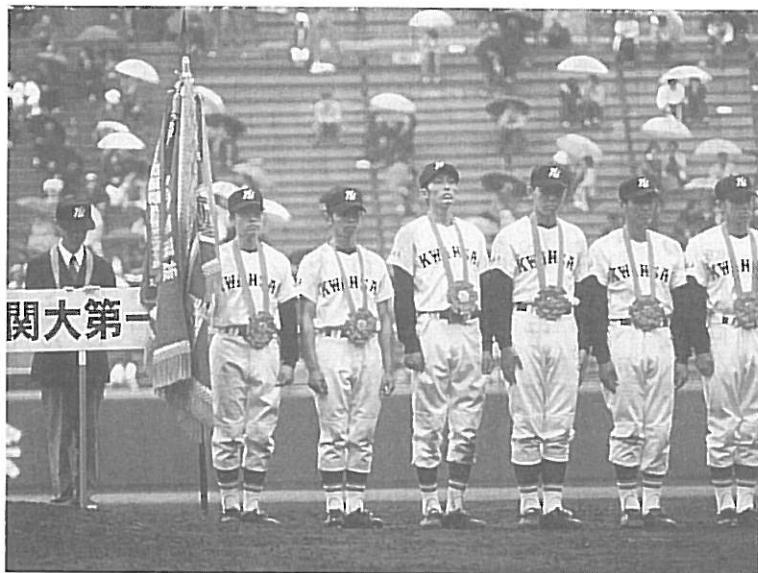
なスイングを心がけるものの、松坂のペースが次第に上がつてきたこともあつて、関大一高はまたしても紺谷、西村、三浦の三人で攻撃終了。

六回表の横浜高は下位打線の攻撃ということもあり、齊藤が四球で出塁したものの、後続がかなわず、打者四人で三アウトとなつた。

そして迎えた六回裏。関大一高に一打同点の好機が訪れた。先頭打者の中本がインコースのストレートをコンパクトに振り抜いて、この試合、二本目の安打（ライト前ヒット）で出塁。さらに穂積の送りバントと、相手バッテリーのパスボールなどで中本は三塁に進んだ。そしてバッター西本の四球目、中本は自分の判断でホームスチールを試みた。「ボーグを誘つて確実に一点が取れると思った。ゲームの流れを変えると信じて走った」（中本）。結果は三本間にはさまれてタッチアウトとなり、スチールは失敗に終わつたが、これは尾崎監督が日ごろからモットーにしている「自分で考えたプレーを」の実践だつた。試合後のインタビューで尾崎監督も「（あの

プレーは選手が）自分で考えたもの。サインではありません。積極的なのでよかつたと思います」と答え、中本を責めようとはしなかつた。むしろ、前日、腕を強打して精彩を欠いている西本に対する配慮が容易に想像されるだけに、監督の胸中は複雑だつた。

七回表、横浜の攻撃。この回、久保の投球は高めに浮き、制球に苦しんだ。一死後、柴が高めのストレートを上からうまくヒットしてライト線へ運び、穂積が雨の影響で足を取られ、打球の処理に手間取つて三塁まで達した。さらに松坂への一球目、あわやデットボールという球を西本が後逸、柴が生還して横浜は貴重な追加点をあげた（二一〇）。その後、松坂も右中間を破る三塁打で続き、さらに小山のレフト犠牲打で松坂がタップアップして生還、勝利の女神を大きく手元に引き寄せた。キャッチャー西本が構えているのとは違う場所へ高めに浮いた久保の球を見逃さず、集中打でたたみかけるあたりは、大会屈指の強豪チームと呼ばれるのにふさわしい攻めだつた。



準優勝のメダルを首に整列する選手たち

そして最終回。幕切れは意外なほどあつけなかつた。関大一高は最後まで攻撃の手をゆるめなかつたが、松坂の力投のまえに三者凡退で試合終了。優勝の快挙はならなかつたが、大きな夢を与えてくれたナインの健闘を称えるスタンドの声援はいつまでも鳴り止まなかつた。敗れたとはいへ、選手の目に涙はなく、どの顔もみな自信に満ち、やるべきことを精一杯やり遂げた満足感にあふれていた。

さらにまた、第七十回大会を記念して創設された「応援団表彰」でも関大一高は優秀賞五校の一つに選ばれ、準優勝の栄誉にもう一つ大きな花を添えた。

横 浜	0	1	0	0	0	2	0	0	3
関大一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

期せずして起つた「尾崎コール」

復活までの六十九年にわたる空白期間の半分以上、指導三十八年目にして初めてチームを甲子園に導いた尾崎

監督の念願の一つは甲子園で校歌を歌うことだった。せめて一度は、と胸に秘めて臨んだ鈴鹿高との初戦は予想外の大量得点で楽勝だった。しかし、念願の校歌は「感無量で口にしようにも声が出ませんでした」。一勝して責任を果たしたという安堵感もあって、思わず涙腺がゆるんでしまったのである。続く今治西高との対戦も「目で歌いました」。

なんとか校歌が歌えたのは、大会も大詰めをむかえた準決勝・日大藤沢高戦のときだった。それはまた、尾崎監督にとって最初で最後に歌つたセンバツでの校歌だった。

「直立不動で校歌を聞いていた監督を見たら、こちらまで泣きそうになつた」（田中直幸野球部OB）

「古風な人で、かなり細かいことも言うタイプ」。横山主将の尾崎監督評であるが、甲子園ではむしろ静かに試合を見守った。その一方で「大勢の人が来てくれている。楽しくやろう」、打席に向かう選手には「歌でも歌つていけ」と声をかけたりもした。年配ということだけ

でなく、その人柄や「人は努力を裏切るが、努力は人を裏切らない」といった指導の理念の面からも、尾崎監督はこの大会で最も注目された監督の一人であった。

決勝戦終了後、三塁側アルプススタンドに陣取る応援席に挨拶した選手たちがダッグアウトに引き返す途中、ちょっととしたハピニングが起つた。

「お・ざ・きー」「お・ざ・きー」「お・ざ・きー」…

アルプススタンドと内野席のあいだあたりからわき起つた「尾崎コール」は瞬く間に広がり、一転して銀傘をゆるがす大声援となつた。

「こんなことは初めてですよ」と大会終了後、高校野球連盟の関係者も語つたが、それは学生監督時代から三十八年の長きにわたつて指導を続け、連日の熱戦で大きな感動を与えたベテラン指揮官に対する感謝とねぎらいの拍手であつた。

また、これに対しても「律儀に帽子をとつて応えるあたりが、いかにも尾崎監督らしい」。



選手に指示を出す尾崎光宏監督

勝利の方程式

「よく戦った。自信をつかんだ」。センバツ終了後、熱戦の日々を振り返って尾崎監督はこう胸を張った。そして同時に「(この子らは) 何と大変なことをしたもの よ……」とも。

全国の高いレベルで互角に戦えることを証明した関大一高野球部。終始見せた果敢な攻めと、横山を初めとするナインの手堅い守備は、幾度となく試合を盛り上げて立派だった。また、主戦・久保のテンポの良いピッチングと、女房役・西本の絶妙ともいえる好リードは、出場三十六校の中でも際立っていた。

「甲子園はすばらしいところですね。三試合戦って、心・技・体ともに選手が大きくなっているのが手に取る ように分かるんです」

準々決勝で浦和学院を破ったあと、尾崎監督は報道陣 のインタビューに答えてこう語っている。舞台が、取り巻く環境が、人間を大きく変えた一つの典型的な例かも しれない。

付記 本稿の執筆にあたって尾崎光宏監督から長時間にわたって種々貴重なお話をうかがうことができました。末尾ながら、記して感謝の念をささげます。

(くま ひろき 事業局出版部出版課課長補佐)



準優勝報告会でくす玉を割るナイン

運と努力の結晶、無欲の勝利、若さのなせるわざ……、勝利の方程式にはさまざまな要素がひそんでいる。しかし、もう一つ、選手たちのミラクルパワーを引き出そうとした人たちの存在も忘れてはならない。現役・O.B.が一丸となつて燃え、全国にその名を轟かせた大声援は、あふれるばかりの母校愛を示して感動的ですらあつた。

その意味で、センバツのこの二週間は「人の親和」を謳う関西大学にとってもまた、大きな財産となる栄光の日々であつた。